

中国から見た長崎の歴史的意義 — 要人来訪・長崎市・福州市との交流状況 —*

高山 乾 忠**

Nagasaki's historical significance from the viewpoint of China
— Exchange situation in the Nagasaki City and Fuzhou City dignitaries visit —

Kenchu Takayama**

キーワード:

歴史、文化理解、日中交流、文化理解

はじめに

日中の交流は今から二千年前の西暦57年、倭の奴国が後漢の光武帝に使節を朝貢して金印を賜与されて以来、始まったことは誰もが知ることである。尤も、必ずしも当時の倭国が即日本全体を意味するというものではないが、両国の深い、そして長きにわたる文化交流の歴史はここに改めていうまでも無いことである。

長崎県は日本の最西端に位置し、中国大陆に近いという地理的条件からも、遣隋使や遣唐使の派遣、御貿易朱印船など、古くから日中両国の交流と友好に大きな役割を果たし、特に元龜2年(1571)に長崎は自由港として開港し、中国および南蛮諸国との交易により繁栄し、また寛永16年(1639)鎖国に際し、唯一の開港地と認められ、安政6年(1859)5月28日開国までの220年間、中国などの文化を受け入れ、また明治26年(1893)清国政府と在日唐人の協力によって、中国の総本山並に伝統美に溢れた「孔子廟」が作られた。



図1 明治26年(1893)清国政府と在日唐人の協力によって、造った「孔子廟」

出典 『ながさき・ごらく・Magazineととって』上海航路開通記念号2011年11月

これらの文化は日本近世近代文化に重要かつ巨大な役割を果たした港町でした。この長い歴史の中、様々な中国文化の伝播と影響や日本文化の独自性と創造性についてお互いに認め合ってきた。

昭和47年(1972)9月ようやく実現した国交正常化以来、日中関係は幾度も大きな「揺れ」を繰り返しながら、はや40年の歳月が「光陰矢の如し」のようにあっという間に過ぎた。この40年という歳月は、両国間にとって、意味ある何かを生み出すのに決して少なくない時間であることは確かである。この過ぎ去りし40年を振り返りながら、今日改めて「日中関係とは何か」を吟味することは、以下の理由から通常の相互理解の範囲を超えて特に意味のあることと考え、またその日中関係は両国自身のみならず、第三国、更に世界的なイシューにおいても、その重要性をますます増大させているよう見える。

(1) 他国間との関係と比較するならば、地理的、文化的、歴史的に極めて近く深く影響し合った国同士の関係である。(2) アジアの近現代史の中では時代の過渡期において強い結び付きを示した。(3) 日中双方は近代史以降を見てもそうであるが、特に今日においては、とりわけ強力なパートナー関係である。また別の角度から見れば、日中の関係それ自体が、今日そして将来の、アジアさらには世界の安定と平和に大きく影響するような国際的に重要なファクターとなりつつある。

上述の内容と規模の面から見れば、重要なポイントが分かる。まず昭和50年代の後半であり、次は昭和60年代の後半である。昭和53年(1978)の8月に日中平和友好条約が締結され、更に同年の12月に中共第11期3中総会が開かれて、「四つの現代化」を目指し対外開放が基本政策の一つとして確認された年であった。昭和50年代は両国関係の発展が単に二国間の問題にとどまらず、アジアさ

* Received February 21, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

らには世界の平和と繁栄に寄与することを示した。昭和55年以降は交流の幅が必ずしも「友好人士」と言われる人々に限らず、あらゆるレベルの人を含む極めて幅の広い両国関係となっていくことを意味したのである。

昭和50年代の後半の時期には日本では空前の“中国ブーム”とでもいうべき現象が生まれた。若者の間で中国語熱が高まり、企業家の間でも中国との貿易に熱いまなざしが向けられ始めた。また中国のサイドからは急速に成長する日本経済により、中国の近代化実現を図る協力要請が日増しに強まっていった。昭和57年（1982）秋より、中国共産党総書記に就任した胡耀邦と中曽根首相とのパートナーシップが築かれ、昭和58年（1983）から昭和59年（1984）にかけての日中関係は、二千年の歴史の中で「最良の時期」を迎えたとも言われるようになった。「日中友好21世紀委員会」の発足、「日中友好青年の船」の訪中などが実現した。

さて、これまで概観してきた国交正常化以後の40年を歴史の中でその変化を振り返って見れば、まず交流の幅や量の飛躍的な増大が挙げられる。日中間の人的の往来も、政治・経済・文化各方面の要人らの訪問から、一般の人々の観光や青少年交流、留学や学術交流などを含む幅広いものとなっている。そして両国関係の質も変化してきた。正常化以前の両国関係は政治最優先であったが、政治のみならず経済、更には社会や文化などの交流も重要な部分となり、直接に関係しあうファクターが政府のみならず、経済関係者、地方の指導者、実務者、一般人など多様な人々となってきた。

Ⅰ. 中国要人の長崎訪問

長崎県においては昭和47年（1972）9月に日中両国の国交が正常化して以来、両国の様々な要人がお互いに往来し、密接な交流を保ち、友好を促進して来たことは誰もが知る通りである。日中国交正常化の前年昭和46年（1971）5月に、当時の久保知事が卓越した判断により、「中国はひとつ」と県議会で発言した。7月には長崎県議会が政府に対し、日中国交回復と貿易促進に関する要望決議を行った。更に、昭和47年（1972）9月の国交正常化から1ヶ月もたたないうちに日本の地方自治体としては初めて久保知事自らが団長となり、友好訪中団を派遣するなど全国に先駆けて中国との交流を進めてきたのである。これまでの日中友好交流の歴史的軌路を要約すると次のようである。



図2 「明華号」廖団長と長崎県久保知事
出典 長崎県日中親善協議会 明華号特集1979年7月号



図3 中国共産党総書記胡耀邦来訪
出典 長崎県日中親善協議会 1984年2月号

昭和46年（1971）5月長崎県知事（久保勘一氏）が「中国はひとつ」と県議会で表明。

昭和54年（1979）6月、中日友好の船「明華号」長崎寄港、廖承志団長（中国全国人民代表大会副委員長）一行が来訪。昭和54年（1979）9月、「長崎・上海」定期航空路が開設。昭和55年（1980）2月、初の県中国語弁論大会開催時に中国駐日本国特命全権大使符浩が参加。昭和58年（1983）11月中国共産党の胡耀邦総記ら一行が長崎県を訪問その際、『胡総書記は「江戸のかたきを長崎で討つ」のことわざを引用し、「江戸で起こったことを長崎で円満解決すると（私は）理解するが、その意味で今訪日は東京（江戸）で始まって長崎でよりいっそう円満な成功を収められると確信する」と挨拶し⁷⁾、その具現化の第一歩として（中国駐長崎総領事館開設）表明。昭和60年（1985）5月、中国駐長崎総領事館開設。初代総領王振宇氏が着任。昭和63年（1988）11月第2代総領事顔萬榮氏

が着任。平成4年（1992）12月第3代総領事孫平氏が着任。



中国総領事館のプレートの除幕をする高田知事（中央）と王総領事（右）

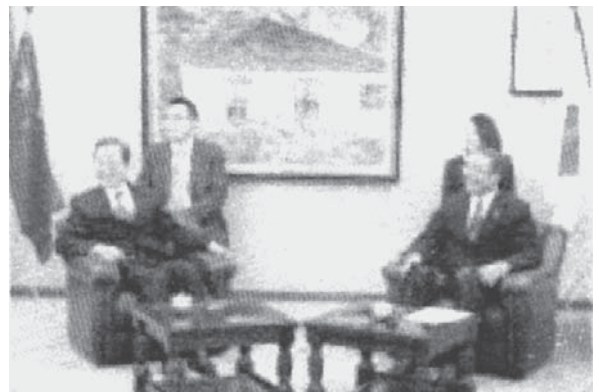
図4 写真（右）中国初代領事

出典 『きょうの新聞』 長崎市総務広報課 1985年5月

平成5年（1993）徐敦信中国駐日本国大使が孔子廟建立百周年記念事業参加のため来訪。平成6年（1994）6月、長崎・上海定期航路開設。平成8年（1996）2月第4代総領事曾文彬氏が着任。平成11年（1999）4月第5代総領事張煥忠氏が着任。平成11年（1999）12月、李瑞環中国人民政治協商會議主席一行が来訪。平成12年（2000）9月、全国人民代表大会華僑委員會代表團が来訪。同年9月、李道豫中国全国人民代表大会常務委員會委員一行が来訪。同年10月、福建省人民政府賈錫太副省長一行が来訪。平成12年（2000）12月、中国共産党上海市委員会龔學平一行が来訪。平成13年（2001）2月、福建省習近平省長が来訪。同年11月9月、何水暉中国国家旅游局長一行が来訪。同年11月、孫文の銅像除幕式。平成14年（2002）6月第6代総領事王昆氏が着任。平成14年（2002）11月、福建省友好親善代表團汪毅夫副省長一行が来訪。平成16年（2004）11月、宋健中日友好協會會長一行が来訪。同年12月、王毅中国駐日本国大使が来訪。同年12月、中国共産党中央青年幹部代表團が来訪。平成18年（2006）6月、上海市人民代表大会常務委員會主任龔學平一行が来訪。平成19年（2007）3月第7代総領事滕安軍氏が着任。同年12月、中国全国人民代表大会常務委員會代表團一行が来訪。平成20年（2008）、中国駐日本国大使催天凱が来訪。平成21年（2009）、中国人民對外友好協會常務副會長李小林一行が来訪。同年、中日友好協會秘書長袁敏道一行が来訪。平成22年（2010）6月第8代総領事李文亮氏が着任。平成22年（2010）12月中国駐長崎総領事館開設25周年記念祝賀会を開催した。



左：楊振亜 元駐日大使、中央：程永華 駐日大使、右：中村知事
祝賀会の様子（12月18日、長崎市）



程永華中華人民共和國駐日大使が知事を表敬
（12月17日、県庁）

図5 中国駐長崎総領事館開設25周年記念祝賀会

出典 長崎県日中親善協議会 2010年5月号

祝賀会には、程永華中国駐日本国大使夫妻、楊振亜元中国駐日本国大使をはじめ、中国外交部の皆様などのご列席のもと、中村法道知事、末吉光徳県議會議長のほか、県内市長や経済界、華僑、国際交流団体など多くの方々が出席し、盛大に行われた。中国の多数の要人が国交正常化後に続々と本県を訪問したことは、長崎県は中国にとって歴史的に重要な意味を持ち、且つ重要な位置を占めていると言えよう。平成23年（2011）10月は孫文の「辛亥革命」100年の記念すべき年に当たる。「三民主義」を唱えて中国の民主主義革命を主導した孫文は16回に及ぶ渡日の中で、神戸の他、九州管内の各地に足を運び、うちの9回は長崎である。孫文は足かけ10年、彼の理想を実現する手助けをしようと、生涯支え続けた長崎出身の梅屋庄吉や熊本出身の宮崎滔天たちの多くは「九州人」である。彼らは祖国愛に燃えた中国の人々の痛みや苦しみを我がものとして共感し、共に手を取り合い、西洋列強による中国の植民地支配という搾取と抑圧、屈辱の中から立ちあがり、中国の独立と尊厳

を取り戻すための戦いを支援し、辛亥革命に大いに貢献した。中国政府は辛亥革命100周年を記念し、孫文の功績を振り返ると同時に、梅屋庄吉氏が中国に贈った孫文像4体に対する返礼として、孫文、梅屋庄吉氏、徳子夫人3人の全身像と徳子夫人の上半像を長崎に贈呈した。長崎歴史文化博物館の特別企画展として「孫文・梅屋庄吉と長崎」を開催し、中国革命に賛同し、支援して下さった友人を偲ぶため、また更に梅屋庄吉と孫文の厚い友情が受け継がれ、日中両国間の新しい交流の夜明けとなるよう期待される。



図6 孫文、梅屋庄吉氏、徳子夫人の全身像
出典 中国新聞 2011年10月

Ⅱ. 長崎市と中国・福州市間の交流

日本と中国両国の友好関係は古来非常に密接であり、しばしば一衣帯水と形容されてきた。長崎県は地理的にも中国大陆に近く、昔から、日中両国の交流と友好に大きく寄与してきた。長い歴史の中で様々な中国文化の伝播と影響を受けその中から長崎独自の文化や融合した物品が生まれ、お互いの重要性を認め合ってきた。17～19世紀の、いわゆる日本が鎖国の最中であってさえも、長崎は日本の玄関口として中国などの国とも交易が盛んに行われ、栄えていた。今、ざっと長崎市内を見渡して見ても、唐寺という「興福寺」は寛永元年（1624）中国僧の真円により創建した。

「崇福寺」は寛永6年（1629）に創建し、中国様式の寺院としては日本最古のものである。寛永11年（1634）中国の高僧如定によって、日本初石造二連アーチの「眼鏡橋」など、明暦元年（1655）長崎在留の唐人共これを催すペーロン競漕、「長崎くんち」での奉納踊り、ちゃんぽんや皿うどん、また普茶料理やインゲン豆、落花生、蓮根、茶など、様々な文化が日本に輸入されたことは誰もが周知のことである。いかに日中両国の交流が深いものであるかが判然としよう。両国の友好と交流

はそれ程に古くに古く、しかもまた深いのである。

福州市の歴史は越國が紀元前202年に築城したことに始まる。唐代725年にこの地に福州都督府が設置されて福州と呼ばれるようになり、五代十国時代には閩国の都となった。明の時代になると、市舶司が泉州から福州に移転した。それに伴い琉球王国の指定入港地となり、琉球館が設置されるなど対外貿易拠点となった。アヘン戦争後の弘化元年（1844）に締結された商事条約によって対外開港された。



図7 「崇福寺」は寛永6年（1629）に創建
出典 『ながさき・ごくらく・Magazineととって』上海航路開通記念号2011年11月



図8 寛永11年（1634）中国の高僧如定によって、日本初石造りの「眼鏡橋」

出典 『ながさき・ごくらく・Magazineととって』上海航路開通記念号2011年11月

Ⅲ. 長崎市と福州市姉妹都市締結の経緯

長崎に住む華僑の方のほとんどは福建省の出身であり、その歴史的なつながりから、昭和54年（1979）に中日友好の船「明華号」が長崎を訪問した際、中日友好協会会長に福州市との友好都市提携の要望書を提出したことから友好都市提携への動きが始まった。昭和55年（1980）4月、本島元市長をはじめとした「長崎市民の翼」の代表団が訪中した際に福州市に友好都市提携を申し入れて両都市の合意がまとまり、同年10月には福州市友好代表団が来崎し、長崎市議会議場において友好

都市締結調印式を挙げるに至った。長崎市は県より2年も早く福州との友好姉妹都市締結を樹立した。両市の密接な交流の主なものは次の通りである。

(1) 両市交流分野と実績

長崎市と福州市は友好都市を提携後30年、両市は経済・技術・文化などの面において官民一体となった様々な交流を行い、また研修員受入事業では、技術指導者などを受け入れ、専門分野の技術研修、新知識の習得或いは再訓練を行うとともに、日本の産業、文化を紹介することを目的としている。自治体レベルでは主に農林水産分野、保健医療分野、公共・公益分野などで、民間企業レベルでは人造りの分野である。また市民レベルでは主に文化事業交流である。



図9 福州市の写真

出典 『長崎市・福州市友好都市提携30周年記念誌』市政記事 2011年3月

①農林水産分野

交流事業は昭和56年（1981）から始めて30年になった。自治体としては技術者や研修生などの相互派遣を行い、水産分野における相互訪問は43回であるが、うち長崎市から福州市への訪問団の派遣は17回で、福州市から長崎市への訪問団の派遣は26回である。技術交流においては、長崎市から福州市にクロアワビ親貝の寄贈を契機に、福州市において品種改良を行い、成長が早く病気に強いハイブリッドアワビを開発し、ことにより福州市のアワビ養殖業は飛躍的に発展した。その他、長崎市から福州市にアカウニ、ウミブドウなどの優良種苗を寄贈した。福州市から長崎市に寄贈したコンブ種苗やハイブリッドアワビは、増養殖技術開発に寄与し、両市は優良品種の相互寄贈の実績を重ねた。水産研修生の相互派遣について、福州市は長崎市に水産研修生を10回、13人派遣した。平成20年（2008）4月には、田上富久長崎市長一行が福州市を訪問し、水産交流のさらなる強化及

び水産技術研究の相互協力のため、毎年水産研修生各1人を相互派遣する「長崎市と福州市との水産交流協議書」に調印した。長崎市は平成20年度以降3回、3人派遣し、技術交流と相互協力を促進した。



図10 アワビ養殖基地を視察

出典 『長崎市・福州市友好都市提携30周年記念誌』市政記事 2011年3月

上述以外の相互友好交流では、福州市は長崎市に農林水産関係者計16回、86人を派遣し、長崎市は福州市に農林水産関係者計15回、58人を派遣した。

②保健医療分野

昭和60年（1985）2月、福州市の医学研修生が長崎で研修。

③公共・公益分野

海外自治体職員協力交流事業においては主に環境保全や上下水道など、研修生の所属や希望を重視しつつ、環境保全を重点に、平成9年（1997）から平成17年（2005）まで累計7回10名の実績である。今後両市の環境保全についての対策分野や文化交流分野にも協力が広がりつつある。

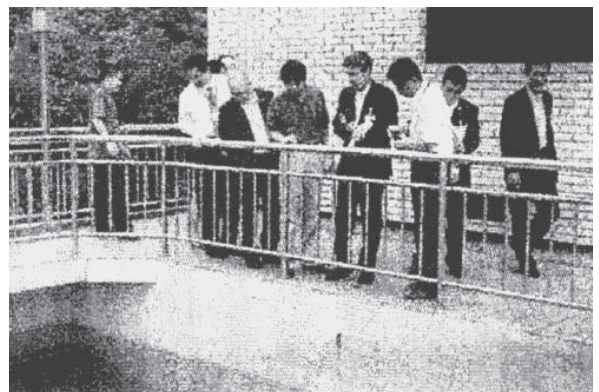


図11 上下水道視察

出典 『長崎市・福州市友好都市提携30周年記念誌』市政記事 2011年3月

④民間企業レベル

昭和56年（1981）以降の交流形態と主な実績は以下の通りである。

昭和56年（1981）2月、福州市物産展（工芸品や写真など計5,200点）を長崎市の浜屋と岡政デパートで展示、即売を開催。同年7月、福州市水産冷凍・水産加工の技術者2名が大洋漁業長崎支社と長崎水産加工業共同組合で研修。昭和57年（1982）2月、長崎市の岡政デパートと福州デパートが縁結び。昭和58年（1983）3月福州の研修生5名が長崎市の岡政デパートで3カ月間の研修。昭和59年（1984）5月、長崎市の浜屋デパートが企画し、日本の「母の日」に福州の子どもたちの絵を長崎の路面電車で展示した。

⑤人造りの分野

昭和57年（1982）2月、スポーツ親善試合のため長崎卓球協会の卓球選手が福州を訪問。昭和58年2月、長崎市が福州市の要請で小、中学校の教科書250冊を贈呈。昭和59年（1984）1月、長崎女子商業・福州第三中学校と初の姉妹校を締結。同年2月、県職員と県立高校に寄贈を呼びかけ、教科書、辞書、絵本など計17,878冊を長崎水産高校の長水丸で寄贈。同年7月、長崎市が中国語の観光案内を出版。昭和60年（1985）2月、長崎市役所が教育機器（オルガン31台、テレビ18台）を福州市に贈る。長崎市「日中友好あじさいの船」で小・中学生160名が音楽やスポーツ料理の交流を兼ねて福州訪問。平成5年（1993）8月、「長崎少年大使訪中団」が福州を交流訪問（福州第三中学校との交流）。同年、福州少年交流団が長崎訪問。平成6年（1994）8月、「長崎少年大使訪中団」が福州を交流訪問（林則徐学校との交流）。同年、福州少年交流団が長崎訪問（桜小・淵中との交流）。平成7年（1995）2月、少年大使一福州交流訪問。



図12 17,878冊図書を積んだ長崎水産高校長水丸出港
出典 『きょうの新聞』 長崎市総務広報課 1984年2月8日

⑥市民レベルの協力実績

市民レベルでの密接な交流もあることを知って戴くため、以下、参考として少し列記しておきたい。

昭和62年（1987）12月、長崎歴史帆船協会は「旅」博の新しい目玉として、唐人船を福州市造船所に発注し、平成元年（1989）4月に復元唐人船が帰港。平成10年（1998）2月、長崎市ペーロンチームが「福州市ドラゴンボートレース大会」に参加。平成22年（2010）7月は両友好都市提携30周年にあたり、開催された「海フェスタながさき」に両市の関係者や市民が多数参加。

⑦名誉称号授与

「名誉称号」とは、両市の友好交流に多大な尽力や貢献をした人物に与えるものである。

平成7年（1995）2月、長崎市本島等市長が「福州名誉市民」称号を受章。平成16年（2004）2月、長崎市伊藤一長市長が「福州市荣誉市民証」を授与。平成18年（2006）7月、福州市人民代表大会主任（前市長）に「長崎市国際親善荣誉賞」を授与。平成22年（2010）6月、長崎市田上富久市長が「福州荣誉市民証」を授与。同日、福州市市長に「長崎市国際親善荣誉賞」を贈呈。



図13 長崎田上の「福州荣誉市民証」授与
出典 『長崎市・福州市友好都市提携30周年記念誌』 市政記事 2011年3月

この30年余り、さまざまな人々の努力により、長崎・福州両市の友好な関係が築かれ、また維持されて来た訳だが、概観した特徴を踏えるならば、アプローチとしては特徴的な部分と一般的な部分を包括し、且つ両市の特性を活かしつつと同時に、他の省、市更には他の地域的規模での国際構造の中で複合的に捉え直していかなければならない関係であることを理解し、更なる両市の発展へと相互に協力していきたいと切に願うものである。

20世紀初頭に既に上海航路は両都市間に開通し

ていた。この日中間の最短航路を担っていた連絡船の「長崎丸」と「上海丸」は長崎で日常的な交通手段として大変な人気であった。しかし、この華やかだった上海航路は、残酷な戦争によって壊滅され、20年間余りで幕を閉じた。それから半世紀。日中友好の期待を担って平成の新上海航路が平成6年（1994）に生まれ、初め海華号（13,481トン）が就航、2年後の平成8年（1996）3月から長崎上海号（11,008トン）に更新された。新航路は日中双方の合弁会社で運航されたが、利用率の低迷により平成9年（1997）1月から再度休航となった。あれから十数年を経た今、情勢は一変し「平和」と「発展」が時代の流れになっている。長崎から上海への客船航路が14年ぶりに復活することとなった。平成23年（2011）11月、その第1便が3日午前に長崎から上海に向けて出港した。就航した客船オーシャンローズ（3万412トン）は午前10時に長崎港を出発し、上海には4日午後1時（現地時間）ごろに到着する予定だ。出港に先立ち長崎港では長崎県の県関係者や在長崎中国総領事館の関係者ら約150人が出席して記念イベントが行われ航路の復活を祝った。

この上海－長崎航路の復活は中国人観光客誘致を狙う地元の佐世保市のテーマパーク「ハウステンボス」によって行われたものである。長崎県知事中村法道氏は「長崎人は中国に対して懐かしさと尊敬の情を持って中国人観光客を受け入れることができ、これは数百年の歴史が育んだ特殊な関係の文化であり、日本の他の場所にはないことだ」と述べ、今回の航路復活によってより多くの中国人観光客が長崎を訪れてくれるよう期待という。正式な運行は平成24年2月末である。

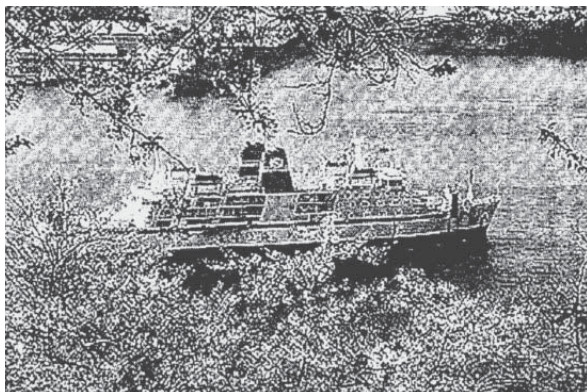


図14 寄港客船オーシャンローズ

出典 『長崎県文化百選、長崎県事始め編』（撮影・坂本勲氏）

おわりに

リーマン・ショックやギリシャ危機以来、世界

は政治的にも経済的にも激しく動揺し続けているが、今こそ、私たちアジアの同胞が大同団結し、手に手を携え一致協力し合って世界の安定と秩序を回復し、世界人類の平和と幸福に大きく寄与すべき時が来たと思う。

私たち日中両国はアジア太平洋地域や世界の平和と安定、発展に対して大きな影響力を有しており、また、厳粛な責任を負っていることは此处に改めていうまでも無いことである。今後、日中両国の友好関係が絶え間なく続く長江の流れのように、天地の続く限り悠久に続いていくことを切望するものである。

【参考文献】

- [1] 『きょうの新聞』長崎市政記事1966年5月15日～2005年10月23日
- [2] 『西日本新聞』2011年8月10日、同年8月24日、9月1日記事。
- [3] 『明華号特集』長崎県日中親善協議会1979年5月号～2011年3月号記事。
- [4] 『朝日新聞社』ニュース、長崎－上海航路が復活2011年11月3日記事。
- [5] 長崎県文化百選：長崎県事始め編、2012年1月16日記事。
- [6] 長崎文化協会『長崎文化』第55号記事。
- [7] 『長崎市・福州市友好都市提携30周年記念誌』市政記事。
- [8] 『ながさき・ごくらく・Magazineととって』上海航路開通記念号2011年11月
- [9] 『長崎市市史』2012年一部抜粋

【論文中引用した文の出典】

- ア『きょうの新聞』長崎市政記事1983年11月3日

